

スケボーでしか味わえない感動を

スケートパークのオープンは早く、1995年のこと。先駆けとしての苦労もあったが、長年、志摩市でのスケートボード普及に尽力してきた。

今、オリンピック競技となつて、スケボーを取り巻く環境は変化している。

自分の世界に没頭しながら、風を切りながら進む

「スケボーは奥が深い。跳ぶ一つをとつてもそうで、板と一緒にジャンプする“オーリー”ができるようになつたら、次は板をくるくる回して“フリップ”に挑戦。でさきるまで繰り返していると、迷いから抜け出して、自分のものになる瞬間があるんですね。今でもそういうことはあります」と、「B7 EAST SHOP」で講師を務める森本泰斗さん。失敗しても、その悔しさをバネに、何

度も何度も練習を重ねる。泰斗さんのスケボー人生は、27年前にスケートパークをオープンさせたことに始まる。泰斗さんは、当時、小学4年生。パークに通っていた高校生や年上の先輩を見様見真似で覚え、技を習得していく。スケボーでは技のことを、「トリック」と呼び、基本をしつかり学び、少しずつできるトリックが増えてくると成長を感じられ、達成感が生まれる。ショッピング奥の事務所には膨大な量のビデオやDVDが並ぶ。ユー



1.入り口付近を飾るスケボーの板。信頼できるブランドをそろえている 2.ショップカウンターはいつもにぎやか。さまざまな相談事が持ちかけられる 3.果敢にチャレンジする子どもたち。上達は早い

「どんなスケーターも応援したい。嬉しそうに滑っている姿を見るのが何より」



B7の歴史を感じさせるショップ奥の棚。ビデオやDVDがぎゅうぎゅうと並び、26年分のスケートボードの重みが詰まっている

アメリカの西海岸 スケートボードの発祥は

スケートボードが生まれたのは、1940年代のアメリカ・カリiforniaリニアとされているが定かではない。1950年代にはローラースケートを木製の板に付けた商品が発売され、その後試行錯誤を経て、車輪が多少可動したり、鉄製の車輪がラバー製や粘土製になり、徐々に進化し、サーファーの間で波のない日にスケートボードに乗つたり、街中の“足”として利用されたのはこの頃からだつた。

日本で愛好者が増えたのは1960年代からで、サーファーを中心。そのあと若者向けの雑誌で取り上げられるなどして話題となり、1990年代に入るとストリート・スタイルが確立され、そのアッショーンも注目を集めた。お

よそ10年周期でブームが訪れているという。

森本社長はもともと、近畿鶴方駅前で輸入雑貨の店を開いていたが、スケボーをする子たちが現れ、板を商品に加えた。駅前に10人ほどの仲間が集まり、スケボーに夢中になる姿を間近にみていた森本社長は、もっと自由に滑れる場所をと一念発起で現在の場所にパークをつくった。オープン時は愛知や奈良、京都と県外から訪ねてくる人も多く、県内でもパークはまだ有名方面にしかなかつたことがついた。「メーカーとのおつき合いもありましたし、全国で開催する大会にここも組み入れてもらいました」と森本社長。

スケートボードを熱心にサポートする雰囲気と現状

現在、主催するスクールには、幼稚園年長から小学生、中学生がメインに通っている。

東京オリンピックで正式種目となり、結果、金3、銀1、銅1のメダルを日本にもたらし、圧巻の滑りで全国を沸かせた。そんな姿に触れたことで、遊びではなく、子どもに真剣にスケートボードをさせたいと望む親の声もあり、各地のパーク利用者が増え、親子で

始めるケースも多いという。これまでは自己流のスタイルで滑つて

いたが、今後はしっかりとコ

ーチ制度などもできてくると予想される。

スケートボード場の普及を目指す「日本スケートパーク協会」によると、スケボーが楽しめる場所は全国に400カ所余りとなつて

いるが、まだまだ足りないという声が多い。「ショッピングと併設という民間の施設がほとんどでしたが、市営や県営などといった施設も、

全国には増えてきています。スポーツスケーターである同級生の岡洋佑さんと、2人が指導に当たつて

いる。プロは賞金のレースに出る資格を有する選手。そしてスポンサーを得て、商品の提供を受ける場合が多い。



森本敏雄社長と講師・泰斗さん



B7 EAST SHOP / SKATE PARK
志摩市阿児町鵜方1020-11
TEL 0599-43-2600
11:00~20:00/不定休

